Case_04

「マイプロ」からはじまる、まちへの参画

＃ふろぷろKananishi／
＃FROM PROJECT

（上）探究学習的なプロジェクトだが、まちに関わっていくエネルギーの強さに特長がある。写真は、全国大会推薦者による発表
（下）一般社団法人FROM PROJECT
２次元コード

イントロダクション

家庭、学校に次ぐ第3の居場所、地域。
若者の居場所と呼ばれる施設はたくさん聞くけれど、県西地域をまるごとフィールドにしてしまう、画期的な「居場所」が(一社)FROM PROJECTが運営する「ふろぷろ」です。探究学習に通じる「マイプロジェクト」、通称マイプロを通し、中高生とともに独自の活動を展開する「ふろぷろKananishi」の活動を追いました。

FROM PROJECT

先行き不透明なこれからの時代、身を置く環境が変化してもそれに合わせて舵を取り物事を前進させ、世の中に自らが信じる価値を生み出すことが求められます。
そのためには、自らを活かす術を深く知り事実を正しく認識し、目的を持って意思決定を行い、他者と力を合わせ、心に描いたものを実現させる力が大切です。
（一社）FROM PROJECTは、その力をもつ人を増やすと同時に、社会に「グッドインパクト」を与えることを目指しています。
（ウェブサイトより抜粋）

全国各地で展開されてきた「ふろぷろ」は、身近な地域の課題解決を目指す、中高生向けの約100日間の無償プログラムです。2022年から小田原市で、2024年度には「Kananishi（：神奈西）」として、神奈川県から委託を受け広く県西地域の高校生を募集し実施しました。

100日間の流れ

ほぼ毎週末、3時間ほどのワークショップに中高生が集い、大学生等のスタッフメンバーから「知識や思考法」を、まちの大人から「地域の魅力や課題」を学びつつ、自分がやりたいと心から思える「マイプロ」をゼロから編み出して実行します。ワークショップのほか、２回の発表の場では「アウトプットの機会」と「人との出会い」を、上記以外の日には大学生のサポートのもと「プロジェクト実行」や「再挑戦」の機会を提供するというものです。
プロジェクト自体はあくまでも参加者の主体的な活動なので、自分のプロジェクトの社会的意義や自身にとっての目的に何度も立ち返り、悩みながら場面場面での意思決定を重ねることで「自己決定力」を養います。また、チームメンバーや大人の協力者を巻き込み活動を展開することで「他者と協働して目的を達成する力」が身につきます。
最終報告会後には振り返りや学びの一般化を重点的に行い、100日間の学びを一過性のもので終わらせず今後の人生に活かせるよう、消化し切るところまで徹底して行うことが特徴です。

教育的効果

ふろぷろのプログラムは、プロジェクトベーストラーニング（PBL＝課題解決型学習）の考え方を元に、2014年、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの鈴木寛ゼミでスタートしたものが源流ですが、クリエイティブ・ラーニング（CL＝創造による学び）を取り入れるなど、その後絶えずブラッシュアップがなされてきました。

中高生のやりたいことと、身の回りの課題を掛け合わせて「マイプロジェクト」を作っていく上で重視することは、より大きな価値(＝GOOD IMPACT)を生み出すにはどうしたら良いか様々な角度から何度も問いかけ考えさせ、一人ひとりのストレッチゾーンに合った挑戦の機会を提供すること。

代表理事の竹内董さんは、「ふろぷろは『個益』＝自分の幸せ、『公益』＝みんなの幸せと捉え、その２つが重なり合うところにGOOD IMPACT（価値）が生まれると考えます。個益のみの自己満足でも、公益のみの自己犠牲でもない、GOOD IMPACTが生まれるプロジェクト作りを、ふろぷろはサポートしています」と語ります。

最終報告会では取り組んだプロジェクトについてプレゼンし、100日間の学びを振り返ります。そしてこの経験をどう次につなげるか、まちと自分に向き合います。

「今取り組むマイプロジェクトの成否そのものよりも、想定通りにいかないことにぶつかり最初は考えもしなかった別のやり方で乗り越えられたという実体験や、自分でゼロから何かを世の中に創ったという自信を生み出したい。

ふろぷろ卒業後、進学や就職の進路に迷った時、何か新しいことを始めたい時、難しい問題に直面した時にこそ活きてくる力を、地域というフィールドで育てたい。

だから、”プロジェクトから”はじまる、『FROM PROJECT』、なんです。」

高校生の考える課題とは…？

こうして応募の中高生とともに走り出した2024年のプロジェクト。9月16日(月・祝)に南足柄市子育て支援拠点施設「にこっと」で実施された中間報告会では、次のようなプロジェクトが動き出していました。切実な想いから壮大な夢まで話題は様々ですが、SDGsへのまなざしを感じさせる発想はやはり多い印象です。

発表では必ず身近なまちや人々の様子が語られ、そんなところを見ているのか…と目から鱗の発想も。他のメンバーやスタッフ、地域の大人との対話の中で、まちのどこで、どのようなプロジェクトを進めていくか、具体的な範囲が絞られていきます。

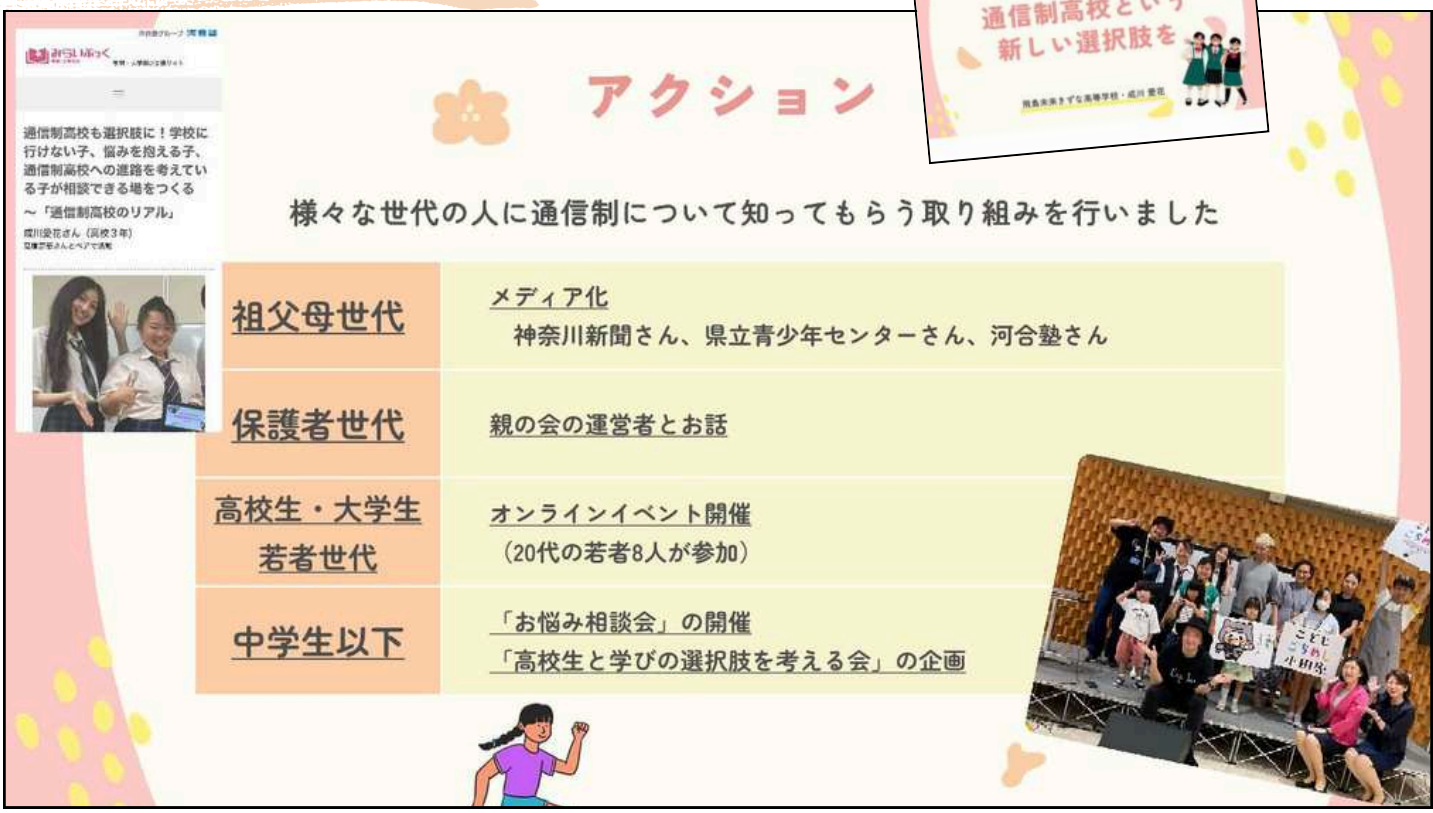
（左）100日間の基本的な流れ。決まったオフィスはなく、オンラインも含め様々な会場で展開していく

（右）中間報告会時点のマイプロジェクト一覧（原文ママ）。「〇〇における□□」を解決したい、を基本に考える

1 小田原市における、規格外野菜の廃棄が発生していることを解決したい
2 開成町における、競技としての野球は知っているが、野球をやることに関して浸透していないことを解決したい
3 小田原市でみんなが好きなことを話して共有できる場を作りたい！
4 松田町における、自分の通学路が狭いことを解決したい
5 小田原市における、あまり食べられない人による食品ロスを減らす
6 小田原市における、若者が悩みなどを話し合える環境がない、あったとしても知られないことを解決したい
7 小田原市における、地震に対する意識が低いことを解決したい
8 小田原内の結婚披露宴の食べ残しによるフードロスを解決したい
9 山北町・南足柄市における、防災の意識を高めたい
10 南足柄市における、傘をさしても靴や手荷物が雨に濡れることを解決したい
11 箱根町における、観光スポット「スカイウォーク」の渋滞が発生していることを解決したい
12 小田原における、使い終わった教科書の使い道がないことを解決したい
13 小田原市における、目的地に行けなくて困っている観光客を助けたい
14 小田原市における、通信制高校の良さを中学生、親世代などに知ってもらいたい
15 松田町における、文房具を簡単に入手できないことを解決したい
16 小田原市における、歩きスマホを解決したい
17 箱根町における地球温暖化解消のために、電気タクシーを走らせたい
18 小田原市における、なんでも話せる場所がないことを解決したい
19 グラウンドを人工芝に変更することで、県西地域における、サッカー部が弱いことを解決したい
20 アプリを使って小田原市における食品ロスを解決したい
21 小田原市における、エスカレーターが混雑していることを解決したい

100日間を、駆け抜けて

参加者が語る プロジェクトの体験と成長



（上）発表資料の一部。一般の探究学習ではみられないような、多くの関係者、関係団体にコンタクトを取っていたことがわかる

今回ふろぷろKananishiに参加した飛鳥未来きずな高等学校の3年生（取材時）、成川 愛花さん。通信制高校のよさをアピールするマイプロジェクトを企画・実施した2か月後に、現在の心境を伝えてくれました。

—最終報告会に向けて、生徒向けの相談イベントを企画しました。どのような想いで企画されたのでしょうか？

悩みを抱えている生徒たちを集め、悩みをシェアできる居場所を作り、進路に悩んでいる子に学びの選択肢の広さを伝える場を作りたいと思って企画しました。

—タイトな期間での実施でしたが、イベント当日はいかがでしたか？

私の担任と友達しか来なかったので、失敗だったと思っています。中学生、高校生を集めるのが難しかったです。いきなり対面での相談は緊張するだろうし、オンラインでも難しいと思います。

会ったことも話したこともないという状況だと、信頼を得られないですよね。経験にはなりましたが、思った成果が得られず、残念でした。そこから、どうしたら悩んでいる子に届くのか、情報が届いてほしい人に届けるにはどうしたらよいか悩みました。

—10月26日の最終報告会ではその試行錯誤が支持され、全国大会への切符を手にされましたね。全国大会に向けた取り組みを教えてください。

現役生だからこそ話せる高校の良さをいろんな世代の人に伝えたいという想いから、「通信制高校の良さとは？」をテーマに、大学生や社会人に伝えるイベントを企画し、オンラインで開催しました。地域でフリースクールを広めている人に呼びかけてもいただきました。

また、小田原市内の中学校の進路説明会で説明をしたいと思い、各中学校に掛け合いました。時間がなかったこともあり、１校も実現できませんでしたが、好意的な反応の学校もあったので、２月末に話せるかもしれないです。

—イベントを企画してみて自分が変わったと思うことはありますか？

活動を通して、まだ今は後ろ向きな理由で通信制を選ぶ人が多いという現実と向き合いました。一方で、「この子たちには通信制を選択してほしい」と思える人たちを見つけることもできました。

変わったという点では、初めは、電話も怖かったですが、中学校に電話をかけ続けて怖くなくなりました。実際にいろいろと行動に移せるようになったのは、自分が強くなったからだと思います。また、初対面の人に対しても、自分から過去

教えてもらったタスクは1日1つどころではなく、毎日いくつも！

10/25(金)	発表練習完成
10/20(日)	スライド完成
10/14(月)	イベント開催(お悩み相談会)
10 /12(土)	パラレル開催
10 /10(木)	カウンセラーに良い話の聞き方を教わる
10/9(水)	ふろぷろアカウントのインスタで告知
10/4(金)	UMECOと図書館にチラシを直接届けに行
10/4(金)	遠い中高はポストにチラシを投函する
10/4(金)	近い中高にチラシを直接届けに行く
10/3(水)	チラシ印刷
10/2(水)	チラシ完成
10/2(水)	自分の高校のインスタに告知してもらう
10/2(水)	切手購入
10/2(水)	封筒購入
10/2(水)	小田原市内全中高にチラシ貼れるか電話
10/2(水)	イベント開催場所のアポ取り
10/2(水)	チラシを送る先（中高）のリスト化
10 /1(火)	電話で聞く内容を考える
10 /1(火)	アンケートフォーム作り
10/1(火)	どうお悩み相談会を進めていくか決める
9/30(月)	中間報告会
9 /16(月)	
	イベント内容を決める
	歩いてポスター渡せるところを決める

「いろんな人と関わってこそ、まちに愛着が生まれると思います」

成川 愛花さん

ふろぷろKananishi参加者。
高校の先輩に教えてもらったことをきっかけに参加したところ、なんと想像以上に大変で、しかも想像以上に楽しかったのだとか。

の話ができるようになってきたことも大きな変化だと思います。

—全国大会は一泊二日で行われたそうですね。全国大会はどんな感じでしたか？

おもしろい場でした。夜中までスライド作成をしました。全国大会ではレッドカーペットでの入場から自分で考えるんです。とてもよい経験になりました。

—今後はどのように活動されますか？

まずは大学受験が目の前に待っているので、そこをがんばりたいです。
不登校の子だけではなく、いろんな人に通信制の良さを知ってほしいという気持ちは変わっていません。不安を感じている在校生に、通信制の魅力を最大限活用することで楽しい学校生活を送れると知ってほしいし、不登校の子どもや保護者に対しても、通信制という学びの選択肢の魅力を伝えていきたいです。

不登校の子の親の会の方とできたつながりから、受験後には支援機関の方たちと一緒に活動していく予定です。一人だと難しいので、大人と関わってやっていきたいと思っています。現役で通信制に通っている生徒がいると、自身がゲストとなるイベントもやってみたいです。

今、成果は出ていないけれど、続けることでいつか想いは届くと思っています。これから先、活動を続ける中で、自己実現のサポートをしていけるようになりたいです。

—改めて振り返っていかがでしたか？

このプロジェクトに参加した当初、課題解決したいことは何かと問われた時、通信制を広めたいと思いました。
それが自分自身の過去を振り返る機会になり、その中で、やりたいことがはっきりしていきました。今回の活動は課外活動の場というより、教育の場に参加したという気持ちが強いです。

今後は、大学に行きつつ、生活費も稼がなければいけないので、後輩のサポートまではできないかも…と思いますが、たまに参加できるものだったら、参加したいです。
ふろぷろで生まれたいろんな人との関わりの力で、私のプロジェクトも時間はかかるかもしれませんが、届けたい人に届けることができると思います。

—ふろぷろは、教育というよりまちづくりと代表理事の竹内さんがおっしゃっていました。このプロジェクトには、若いうちから地元を好きになってほしいという気持ちがあるそうです。
小田原や県西地域への想いはいかがですか？

実は私、住んでいるのは熱海なんですが、東京から引っ越してきたこともあって地元という感覚があまりないんです。小田原、県西地域のみんなのプロジェクトを近くで見ながら、地元愛が生まれたというか、よい学校を選んだなと思います。将来も、小田原に知り合いが多くいれば戻ってくるきっかけにもなると思います。

ふろぷろには地元企業の社長の方も来ていたので、地元の人も優しい人なんだ、いろんな魅力があったんだと認識する機会にもなりました。やっぱり、いろんな人と関わってこそ、まちに愛着が生まれると思います。
ふろぷろの活動は、県西地域全体を居場所としていると感じています。

中間発表で成川さんと初めて会った時、通信制高校を広めたいという並々ならない情熱を感じました。しかし、活動途中での相談会の失敗や、通信制高校へのステレオタイプ的な目線に触れ、悩んだ時期もあったそうです。
そうした経験からどうしたら人々に届くのかを真剣に考え、行動に移した結果、成川さんの言葉はより重みを持ち、一回りも二回りも強くなったように感じました。人前に立つのは今でも緊張すると笑顔で語る、成川さんの成長が楽しみです。
（聞き手　専門部会委員　益田 麻衣子）

ふろぷろのこと、まちのこと

竹内 菫さんと考える 若者の未来

今回、昨年度までの「ふろぷろ小田原」から県西地区全域に拡大して実施した「ふろぷろKananishi」。若者の社会参画のヒントを探して、「ふろぷろ」のこれまでと仕組みについて、代表理事の竹内 菫さんにインタビューしました。

竹内 菫（すみれ）さん

（一社)FROM PROJECT代表理事。グアムの高校を卒業後、秋田県の国際教養大学に進学し在学中の2020年に一般社団法人FROM PROJECTを設立。主に、中高生の主体的なまちづくり参画を促すための100日間のオリジナルプログラム「ふろぷろ」の開発や提供を行っており、これまでに全国28地域から計3,000人以上が卒業した。

約３年半前に小田原市へ移住後、多くの魅力的な地域人との出会いをきっかけに、神奈川県では初めてのふろぷろである「ふろぷろ小田原」を２年連続で実施。

2024年度は神奈川県から受託した事業、「ふろぷろKananishi」（Kananishi＝神奈西）として神奈川県西地域２市８町の高校生らにプログラムを提供した。また、法人外でも、多面的にまちづくりや人材育成分野に関わり、自らの背景や行動をもとに「自分の人生を自分で創る」ことを全国の学生に伝えている。

（参考）ふろぷろが大切にしている７つの心、「The 7 Hearts」

1：The 7 Hearts ふろぷろ７つの心

今この瞬間に100%

本気でやるのと、なんとなくやるのは雲泥の差で、同じ時間を過ごしても、向き合う姿勢次第で全く違うものになる。だから今に集中して「今」の価値を最大化しよう。

行動至上主義で行こう

行動の伴わないプロジェクトは存在せず、どんなに良いアイデアを思いついても頭の中にあるだけでは、誰にも何の価値も生み出していない。圧倒的行動量の人は圧倒的な経験と学びを得る。

すべてを糧にする

プロジェクトを進めていくと、「100%思い通りで大成功」とは大抵ならない。成功や失敗というラベルに惑わされず、丁寧に振り返り、自分の中で次に繋がるように意味付けをしよう。

半学半教の姿勢で向き合う

ふろぷろには先生がいない。生徒もいない。みんな自分の人生しか生きたことがないから、しかもみんな絶対に違う人生を生きているから、必ず全員に教えられることがあり、学べることがある。

未来は自分で創る

人は変化するし、社会も変化するし、ふろぷろも変化する。全てはその変容の途中で、完成も確定もない。ワークショップの内容が、誰かひとりの意見で変わることもあるし、それができるような柔軟で強いチームで在ろう。

わくわくに任せる

VUCA の時代と言われる現代社会で、「正解」なんて大抵存在しないから、やってみなきゃわからない。何ができそうか、褒められるか、よりも、何がしたいか。自分の中のわくわくを大事に意思決定をしよう。

愛を持って人と協働する

愛を持って協働するとは、相手の意見を優先して自分の意見を抑えるのではなく、相手の意見も自分の意見も大切にした上で、愛のある伝え方で話し、愛を持って話を聴くということ。

10月26日(土)に小田原お堀端コンベンションホールで行われた最終報告会の日は、それぞれがそれぞれに緊張しながら全力を尽くしました。当日、印象に残った「マイプロジェクト」について、竹内さんは顔をほころばせながら次のように語ります。

「もちろん、それぞれ印象に残る点はあったんですけれど、ふろぷろが大事にしているThe 7 Heartsの中の１つ『未来は自分で作る』をまさに体現していた『早雲様レモン洗浄計画』というプロジェクトが印象に残っています。
プログラム初期～中間発表会の頃は電気タクシーに北条早雲像をラッピングするプロジェクトを考えていたんですが、その後企画していたプロジェクトはすでに実施されていることが発覚したんですよね。そのため、新たにこのプロジェクトを立ち上げるに至りました。だから、やや遅れてのスタートダッシュとなりました。
そんな中でも、彼は早雲像を磨くために、小田原市観光協会、市役所の各課、上下水道局など多岐に渡る関係各所に電話をしたり、作成した企画書を提出したりするなど、自主的に交渉を進めていました。並行して、飲食店で廃棄されるレモンの皮を集め続け、最終的に彼の手元には約300個のレモンの皮が集まったんだそうです(笑)

ただ、残念なことに、最終報告会までに早雲像を磨く許可を得ることはできませんでした。
次に早雲さんが描かれたマンホールの縁の洗浄を提案してみたのですが、こちらも許可が下りず…。それでも、彼は諦めませんでしたね。早雲像を洗浄するという夢のためにも、そして集めたレモン300個を無駄にしないためにも、まずはどこかやらせてほしいと。最後は、私がつないだ小田原城の館長の元へ、自分で突撃して直談判していました(笑)。それで、なんとか小田原城の案内板を磨く許可をいただき、最終報告会当日の“朝”、リハーサル開始直前に磨き上げたんです。」

３か月の短期間に、企画書を４つ、チラシも３種類作るという紆余曲折を経た彼は、なんとこの100日間のことを計62枚ものスライドで発表したそうです。

「彼は本当に最後の最後まで『まだ希望はある』と言い続け、100日間を走り切りました。結果的に全然違うプロジェクトに変わったわけなんですが、実は根底は同じで、SDGｓへの強い興味関心、北条早雲に対する愛情が原動力になっているんです。あの時の彼の“熱量”と、心から楽しそうにプレゼンテーションをする姿はとても印象的でした。」

「FROM」PROJECT

ふろぷろというプログラムは区切りこそついたものの、多くの場合、この期間の１度だけの企画・実行だけでは、大きな夢は実現しないもの。
「Good Impact Challenge」という全国大会に選出される参加者には、その後数か月間のサポートがつきますが、彼らの壮大な目標は道半ばです。竹内さんは、そんな状況を理解しつつ、あえてその先は彼らに任せるスタンスだと言います。

「ふろぷろは100日間で『企画の立ち上げ～検証、振り返り』を前提としたプログラムです。ですが、この100日間で全員に成功体験を積んでもらうことが目的ではないんです。この期間で成功も失敗もたくさん経験し、とにかく場数を踏むということを大事にしたいんです。人生で初めて企画書やチラシを作った、人生で初めて直接電話をした―― そういう多くの初体験を伴走し、失敗を恐れすぎずに挑戦できるマインドを育てていく、そのための100日間なんですね。

プロジェクト後にさらに活躍する参加者には、文字通り「100日間を全力でやりきった」という共通点があるのだとか。本当に泣きながらがんばっていたような参加者は、80年の人生に影響するだけの100日間として消化することができ、さらにその先に伸びていくそうです。
大きな成果があった、地域や社会の課題を解決したとまでは言えないプロジェクトであっても、最終報告会で話せることの量と思いの強さは声や表情、姿勢から確実に伝わるもの。そういう参加者がさらに伸びていき、近い未来、社会に影響を与える1人になる実感があると言います。

挫折体験と「失敗力」

失敗を恐れず挑戦し、実体験を学びに昇華させる力 —— ふろぷろがそう定義し、大切にしているという「失敗力」。失敗を単なる「失敗」と捉えない「挑戦の味をしめた状態」は、失敗や挫折から立ち上がる経験なくして得ることはできません。

「実はこのプログラム、必ずどこかで挫折を経験するものなんですよ、ちょっとかわいそうなんですけど(笑)。ふろぷろを卒業する以上、「なんとなく」、「とりあえず適当に」ということはできません。結局は最後に気づく時が来ます。
例えば、参加者のやる気がなかなか着火しないとき、スタッフからフォローに入っても本人からの返答が滞ることもあります。差し伸べられた手や声かけなどのチャンス全てを掴まない選択をした場合に、最終報告会をなあなあの状態で迎えるケースが稀にあります。でもその子たちって、やっぱり最終報告会のステージで自分で気づくんですよね、みんなとの熱量の差や、自分が語れることの少なさに。

ふろぷろの100日間は挑戦の繰り返しです。挑戦には結果が伴い、期待した結果を得られないこと（失敗）も何度も経験します。自分のプロジェクト実施上の失敗であったり、プレゼンテーションや人との関わりの中での失敗であったり…人生で初めての体験だらけの中で大量の挑戦経験と失敗経験を積み、そしてワークショップ内で毎週振り返りも行います。そして、失敗に対する心の耐性と、失敗から得られるものの大きさを体感していきます。そうすると、挑戦の味をしめて、さらに新たな挑戦をするようになり…これがまさに、失敗力のある人が育まれるということですね。

ふろぷろの卒業生には、大学生になった際に当時やってもらったように参加者の伴走がしたいとスタッフ側に回るケースもあります。スタッフになる彼らは、自分自身がものすごく変わったという実感を持ち、その変化が生まれる瞬間を作りたい、見たい、そういう想いで取り組んでいるのだそうです。

「大学生スタッフのすばらしさというのは、参加者に対してがんばっている姿勢を見せたり、間違えたりできることですかね、わかりやすく。
例えば学校の先生がミスをする姿をたくさん見せることって、難しいと思うんですよね。あ、間違えた、あれ忘れた、これやってない、みたいな訳には中々いかない。でも大学生スタッフは分かりやすく「学生」という学ぶ立場でもあるからこそ、見せられる背中があると思うんです。

間違えた時にどう修正しよう、ミスをした時にどうやって謝罪しようとか、そういう姿をより近くで生で見せてくれるのが、彼らなんですよね。たくさんミスができちゃう、挑戦や失敗を一緒に重ねて共に変化していく姿を間近で見せられる、そんな大学生スタッフは、ふろぷろを形作る上で欠かせない存在だと思います。

教育へのまなざし

ふろぷろの活動は、学校教育界でも一つのムーブメントになっている探究型の学習、まさにそのものと言えます。先進的な教育学的理論に基づくプログラムを開発しつつも、あえて学校という枠外で展開する竹内さんは、民間だからこそできることがあると意気込んでいます。

「実は学校と共同でやっていた時期もあります。高校の先生に実際にワークショップを見てもらい、何度かコラボ等のオファーをいただいて関わっていた事例があるんですよね。
ですが、どうしても学校という枠組みには制限があるものです。本当にやりたいことがそのままできるっていうのが一番なんですけど、それが学校というフィールドになった途端、一筋縄では行かないことが多いです。

やりたいことを実現しやすいのは、やはり何にも縛られず自分でやることなので、そういう意味では完全に民間という立場になってやっていく方が、私たちの専門性をより活かすことができますし、ふろぷろが目指すことをより忠実に実現できます。

ふろぷろには大学入試の総合型選抜や学校推薦型選抜(注：旧AO選抜)のためにという参加者も一定数来ていますが、ただ入口は何でもいいと思っています。もちろんピュアな課題意識から参加してくれるのは嬉しいですが、正直なところ、結局プログラムを進めていく中で、入試のために計算してやってるんだ、とかはもう言っていられない状況になるんです(笑)。

目の前の人にどう対応しようとか、今やっちゃったミスどうしようとか、企画してはみたものの参加者が集まらなくて、どうやって実行しよう、とか。そういう瞬間がたくさん出てくることが実際にプロジェクトをやるということなので、入口は何でもいいかなって思っています。

各々がいろいろな理由で入ってきて、そこに例え入試のためという層が一定数いたとしても、出口の時には忘れかけている。そのくらい夢中になれてこそ、入試を含め人生にとって大きな糧となる時間になると思うんです。」

（左、中）北条早雲、小田原城と、その地域ならではの環境が探究のフィールドになる。図らずも、文化を次代に繋ぐ働きも
（右）銅像を磨くために集めたレモンの皮

ふろぷろの考える場づくり、関係づくり

多くの現場の課題である、スタッフの声の掛け方やスタンス。参加者の中高生と大学生年代のスタッフがお互いに学び合う営みを大事にしているふろぷろの現場に、何かヒントが隠されているかもしれません。そこには、ハード・ソフト両面から、場を作るアイディアがありました。

「ハード面では、照明を結構重視しています。何かを考える時間は真っ暗にして電気の蝋燭を使ってみたり、とか。ふろぷろは常に決まった会場でやっているわけではないですが、こういうことはどの会場でも取り組みやすいですよね。ふろぷろらしさみたいなものは実は一定あるので、そういう工夫はあると思います。他にも、椅子や机はできるなら撤廃したいので、できることならお座敷でやろうというのを前提にしています。お座敷で靴を脱いで人が動きやすくなると、障害物も少なくなって人が流動的になりますから。あと、備品に大きなレジャーシートが２つあるんですよ。持ち運び用の取っ手もあり、20人くらいが座れるので、お座敷の会場が借りられない時にはそれを敷いて実施することもあります。

ソフト面で言うと、100日間の序盤はスタッフ側が意見を言い過ぎないことを大切にしています。参加者にはまだふろぷろでの文化やマインドが醸成されてないので、その段階でいろんなことを言うと、『周りの人の言うことは最大限聞かなきゃ』と思っているためか、色々振り回されてしまって自分の考えが分からなくなってしまう。

全部を全部聞き入れる必要はないと思うんです。10人に意見聞いたらみんな全然違うことを言うのなんて当たり前なんですし。でも、それを知らない参加者は「なるべく聞かなきゃ！」、「その通りに変えなくちゃ！」という姿勢がすごく強いので、最初の段階ではスタッフの意見を前面に出すコミュニケーションは控えるように言っています。

ただ最終的には、参加者もスタッフも言いたいことを言い合える状態が理想的だと思います。言わないようにする、言い過ぎないのがよい、というような関わり方については、本来何かを言うことが問題ではなくて、受け取る側がどう受け取るかという問題だと思います。

参加者それぞれが『人の意見には感謝して耳を傾けるけれど、全てを取り込むのではなく、何をどう取り込むかは自分で取捨選択する』という、私たちがふろぷろマインドと呼ぶ姿勢が育まれるような環境づくりこそやるべきことかなと思いますね。」

（聞き手　専門部会委員　益田 麻衣子
事務局職員　長南 悠太　）

レビュー_2024
行政と手を携えて

「県西センターさんと生み出したい価値が重なっているので、事業全体を通して納得感があります」（竹内さん）

民間の立場から行政と協働するふろぷろの事業。国内の様々な地域での事例を知る竹内さんに、行政との関わりについて感想を伺いました。

県西地域県政総合センターの最終報告会告知チラシ
作成：（一社）FROM PROJECT

―今回、県西地域県政総合センターの委託事業となったわけですが、行政と関わる地域の側の方々は一種の難しさを感じる場面もあると聞くことがあります。というのは、一般的に地域が活性化しました、高校生がいきいきやっています、みたいな行政から期待されるゴールがありますよね。そういった行政の思いと、若者たちが本当にそう思っているのか、というところでギャップがあるという悩みを寄せられることが多いんです。お互いに本当は違うところを見ているのに、一つのプロジェクトでやるっていうのは結構大変なのかなっていうふうに想像して。

異なる主体がコラボレーションをしている以上、もちろん難しさはありますが、県西地域県政総合センターさんと私たちは、見ている方向が近いと思っています。ですので、見ているところが違うという点についての大変さはあまり感じませんでしたね。
お互いにこだわりなどはありますが、大枠として目指しているもの、生み出したい価値みたいなものは、言葉は違えど同じなんですよね。

実は、私が４年前に引き継いで今の会社を立ち上げたタイミングから、元々もっと教育色の強かったプログラムの土台に、まちづくりの要素を強化しているんです。まちづくりにとっても地域の若者の参画は重要事項で、学生たちにとっても身近にある実践的な学びのフィールドとして、地域と教育とは、すごく相乗効果の高い組み合わせだと考えています。

自己肯定感の醸成に関する文脈や、ふろぷろの重視する自己と他者への両方の視点などを汲んで、キャッチコピーに「地域と私を好きになる100日間」をご提案いただいたんです。一緒に事を進めるにあたって柔軟に、根気強く対応していただき、色々な相談にも乗ってくださったおかげで、結果的に今出来上がっている。変に無理しているとか、実際やっているものと違うとかという感覚はなく、事業全体を通しての納得感がとてもあります！

―それが行政との相乗効果になっている、というのはすごくいいですよね。そこがうまくいかない例もあると聞きますが、ヒントはどこにあるとお感じですか？

県西地域という、全県でもないし市町でもない、というところがすり合わせやすかった印象があります。教育、商店街、のように行政的にはそれぞれご担当がいらっしゃると思いますが、縦割りを乗り越えて柔軟に対応していただけたと感じています。
それと、やはり人ですかね。行政側にキーパーソンが現れるか、というところも非常に大きいと思います。行政と言っても多様な職員の方々がいらっしゃる中で、今回、県西地域ぐるみで活動ができればまちがよりよくなるから、と熱心に動いてくださった職員の方がいらっしゃって、この企画が実現できました。

（聞き手　事務局職員　長南 悠太）

エディターズ
ノート
探究学習のレイヤー

ふろぷろKananishiの活動中の、成川愛花さんの一コマ。大人の本気の姿勢が学びを深める

近年、まちを舞台にした探究的な活動は、NPO等が行政から委託されるという形で様々な地域で展開されており、子ども・若者の声を施策に反映することを謳う「子ども目線会議」の推進とも軌を一にする形で注目が高まっています。

ここで改めて私たちが探究的な活動について考えるとき、やはり押さえておきたいのは学校で行われる「総合的な探究の時間」についてです。

これまでの総合的な学習の時間が深化する形で2022年より高校でも本格的にスタートしたこの科目は、「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」を目標にしています。

その進め方は、探究の過程で必要な知識及び技能を身につけ、実社会や実生活と自己との関わりから自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析し、まとめ・表現するというものです。このことを通じて、学びに向かう力、人間性といった資質の獲得も目指します。

これをFROM PROJECTの展開する「ふろぷろ」と比較したとき、「総合的な探究の時間」が目指すものそのものであることに気づきます。

一方で「ふろぷろ」の活動には、多くの学校とは異なるいくつかの要素があることもまた、浮かび上がってくるのではないでしょうか。

１つは参加者の主体性の問題です。文部科学省の「今、求められる力を高める 総合的な探究の時間の展開」（令和５年３月）には、教育課程については、「生徒や学校、地域の実態を踏まえて（中略）指導計画を作成し、計画的・組織的な指導に努めるとともに、目標及び内容、具体的な学習活動や指導方法、学校全体の指導体制、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携等について、学校として自己点検・自己評価を行うことが大切である」とされています。

授業時数の中で、学校に通う多くの若者が教科横断的にまちや社会を考える機会が生まれたことは画期的ではありますが、カリキュラムを学校が定める以上、一定程度は大人が若者に授けるものとなり、実際の活動はいわゆる「操り参画」に止まるケースも散見されます。また、進路選択に関わる「評価」を受ける点で、若者のマインドセットも受動的なものになりかねません。

もう1つは伴走する支援者の存在です。活動を大枠でコーディネートする存在はNPO等にもいますし、学校では教員が担います。違う点は、多くのNPO等で参加者のメンターとして少し年上の若者のスタッフ、あるいは地域の人材がつく事例が多いことです。取材を進める中で、この存在が活動のキーパーソンになることがわかってきました。

例えばふろぷろの場合、探究学習のゴール、「まとめる」というアウトプット部分だけではなく、地域で試行錯誤するプロセスの中で常に若者の学びが最大化する仕組みがあります。多くの地域で参考にしたい事例です。

一見似たものにも見える探究活動にも、実際には進める側の得意・不得意や目的の違いがあります。これらのことを、学校外の立場にいる関係者が理解しておくこと、自身の活動の強みを考えることが重要なのではないでしょうか。

どの学校が、どの団体が、誰が優れている、という視点から離れ、若者がまちに関わり得る様々な機会を用意できることが地域の強さであり、資源です。探究のネットワークが増え、レイヤーが何層にも重なり合うとき、若者はどこかでまちと出会い、まちに向き合い、結果として地域は必ず活性化します。

どの活動に参加する若者も、たった１回の青春の時間を使って探究活動に取り組んでいます。その活動の支援に今まさに取り組んでいる、取り組もうとしている、そんなみなさんの活動に期待を寄せずにはいられません。

（事務局職員　長南 悠太）